
仮面ライダー電王～リリカル・クライマックス～

吉田眼鏡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー電王リリカル・クライマックス

【Nコード】

N5278J

【作者名】

吉田眼鏡

【あらすじ】

前世の記憶を持つ少年、“八神”良太郎。彼はある日双子の姉、八神はやてと病院から帰る途中で不思議なパズを拾う。

その出来事をキッカケに彼らは“魔法”と“イマジン”という存在に深く関わって行くことになる。

さあ、クライマックスの始まりだぜ！！

く注意！ この作品は原作の設定をかなりいじくっている部分
が有ります。ご注意ください

プロローグ ブラックコーヒーは子供には辛い（前書き）

初めまして、吉田眼鏡って言います。

自分ばかりな〜り弱い（文才的意味で）ので温かく見守って頂けると幸いです。

注意！ あらすじにも書きましたが、この作品は原作の設定を結構いじっている部分が有ります。

また、オリ主転生物でもあるのでそれらを踏まえた上で読んで頂けると幸いです。

ガッシャーン！！

モモタロス「前フリが長えーっ！」

吉田眼鏡「モ、モモタロス！？」

モモタロス「おい、読者のみんな！ よ〜く聞け！ 作者の眼鏡野郎はこんだが、俺に前フリは無え、最初から最後までクライマックスだ！！ つーわけで仮面ライダー電王〜リリカル・クライマックス〜始まるぜえ！」

ブローグ ブラックコーヒーは子供には辛い

「じゃあ、お大事に」

石田先生がはやて姉ちゃんを乗せた車椅子をこちらに押してくる。

「ありがとうございます。石田先生」

俺はお礼を言いながら車椅子を受け取った。

「はやて姉ちゃん。診察はどうだった？」

「うん。特に容態の悪化は無いって言うてたよ」

朗らかな笑みを浮かべて、はやて姉ちゃんが言った。

「それから良太郎。双子なんやから姉ちゃんは付けなくてもええよ」

はやて姉ちゃん……はやては笑顔のままなのに、何故か有無を言わせない雰囲気放っている。

俺は雰囲気気圧されて、こくこくと頷いた。

……そう、俺達は双子なんだ。

と、言っても当然いくつかの違いはある。

まず、目の色が違う。

はやての目の色は黒みがかった青色だけど俺の目は黒い。

次に髪型も違う。

まあ、性別が違うから当たり前なのかもしれないけど。

はやては可愛いショートヘアで、前髪を髪留めで×印に結んでいる。

対して俺は髪には特に手入れをせず―これに関しては、はやてが激怒する―ボサボサとしたショートヘアで、額にゴーグルを掛けている。

とまあ、多少の違いがあるわけだけど、俺とはやてには決定的な違いが一つある。

……言っとくけど性別とか、そういう意味じゃないよ。

で、その違いって言うのが……

俺に前世の記憶があるって事。

いやいや、お前は何言ってるんだって思うかもしれないけど事実だよ。

所謂^{いわゆる}転生^{てんせい}って言うのかな？

それを体験してるんだ。

前世ではちょっとした事故で死んじゃって……目が覚めたら八神良^{やがみりよ}
太郎^{うたろう}として文字通り、第二の人生を歩んでいる。

現世では数年前に両親が死んじゃって、はやてと二人暮らしだけど、結構幸せに生きています。

さて、そんな俺の日常なんだけど。

今日、それが激変するような出来事が起きたんだ。

「ん？ 何だろう。これ？」

病院から出ること数分。

俺は変な物を拾った。

四角い、樹脂が何かで出来た、黒いケースのような物体。

「それって定期入れとちゃう？」

「あーなるほど」

確かに言われてみれば定期入れに見える気がする。

「はやて、帰る前に警察署に寄ってもいい?」

「ええよ。落とした人も困ってるかもしれへんし」

よし、じゃあ行くか。

side???

「無い……無い。無い。無い」

先程、良太郎達が定期入れらしき物を拾った場所で一人の少女が必死で何かを探していた。

「どうしよう……パスが見つからない」

少女は少し焦っているように見える。

「ん?」

少女は何か落ちているのに気づき拾う。

「何だ、キーホルダーか……」

少女は目に見えて落胆した。

「……もしかしたら誰かが拾ったかしら?」

気を取り直した少女はキーホルダーをポケットにしまい、警察署に向かった。

??? side end

「それじゃあ、ぱぱっと届けてこようか」

「せやな」

警察署の扉を開けた。

「すいませーん！ 落とし物を届けにき……」

「へ？」

俺とはやては同時にすつとんきような声を上げた。

何故なら扉を開いた先にあつたのは建物の中ではなく、どこまでも果てしなく広がる荒野だったからだ。

当然だが俺達が住む海鳴市には荒野は無い。

呆然とする俺達の前に更に驚く事が起きた。

♪

聞き覚えの無い、妙なミュージックホーンが鳴り響くと目の前に線路が高速で組み立てられていき、その上を新幹線が走って来た。

キーー！

ブレーキ音を鳴らしながら新幹線が止まった。

開いた扉から出て来たのは、ピンクのメッシュの女性。

少し変わった制服っぽい服を着ている。

「これどうぞ〜」

メッシュの女性からコーヒーを二つ渡された。

「……あ、どうも」「」

呆けたまま俺達はコーヒーを受け取った。

♪

再びミュージックホーンを鳴らしながら新幹線はどこかへと走り去って行った。

とりあえず、扉を閉めた。

「「……………」」

俺達は呆然としたままだ。

とりあえずコーヒーを一口飲んだ。

「「苦っ！」」

俺達は同時に顔をしかめた。

子供の舌じゃブラックコーヒーは無理みたい。

ちなみに、苦さに顔をしかめたはやての表情が可愛いなって思ったのは内緒だ。

次回予告っぽい物

「特異点〜！？マジかよ！？」

「はやて！？」

「おい、お前！ あいつを助けたいんだろ？ だったら体貸せ！」

「へ、変身！」

「俺、参上！」

仮面ライダー電王〜リリカル・クライマックス〜

第一話 俺、参上！

プロローグ ブラックコーヒーは子供には辛い（後書き）

モモタロス「何でだよ!？」

吉田眼鏡「どーした？ モモタロス？」

モモタロス「どーしたもこーしたも有るかっ！ 何でプロローグに俺の出番が無いんだよ!」

モモタロス「吉田眼鏡の胸ぐらを掴んでいる。」

吉田眼鏡「い、いや大丈夫、次回は出る予定だから」

モモタロス「本当だろうな」

吉田眼鏡「ほ、ほら、次回予告にも出てただろ？」

モモタロス「次回予告を見ている。」

モモタロス「お、確かに。よしっ！ じゃあ、次回は俺の格好いい活躍を楽しみにしてくれよな!」

吉田眼鏡「評価・感想・アドバイスを貰えるとかーなーり嬉しいので待つてまーす!」

第一話 俺、参上！（前書き）

良太郎「ど、どうしよう……」

モモタロス「ん？ どうした？」

良太郎「何か今回の話がグダグダな気がするんだ。それに俺のキャラがプロローグの時とズレてる気がする」

モモタロス「心配すんな！ 俺が格好良く活躍してりゃあ、良太郎のキャラがどんなだろうが全く関係ねえよ」

良太郎「えゝ、それはそれで何か複雑なんだけど」

はやて「仮面ライダー電王ゝリリカル・クライマックスゝ始まります」

モモタロス&良太郎「持ってかれたーーーーっ！！」

P S ・後書きにて八神良太郎の設定を記載します。

第一話 俺、参上！

く???く

「どこだよ、車椅子の双子……」

ブツブツと言いながら、少年が街中を歩いている。

その少年の近くに光の玉が飛んでいる。

「うつ！」

光の玉が少年の体に入った！

すると、少年の体から砂が噴き出す。

砂が集まり、形を変えると上下が逆さまの砂の怪人になった。

「う、うわぁ！」

少年は突然現れた砂の怪人に驚いて尻餅をついた。

そんな少年に砂の怪人が言い放った。

「お前の望みを言え、どんな願いでも一つだけ叶えてやる。お前が払う代償はたった一つ」

「何やったんや……さっきのは……」

「……分かんない」

本当に何だったんだろう。あの新幹線は……

幻かと思ったけど、はやてもはっきりと見たって言うてたし。

それに渡されたコーヒ―は間違いなく本物だった。

「ひよつとして私が良太郎が見た夢やったんかなあ？」

夢……夢なのかな？

「じゃあ確かめてみる？」

そう言うて俺は、はやての両方のほつぺた引つ張った。

みにょーんとほつぺたが、もちの様に伸びる。

はやてのほつぺたはぶにぶにして柔らかかった。

「ひはい、ひはい」（痛い、痛い）

「あ、ごめん」

慌ててほつぺたから手を離す。

「もう、何するんや」

少し涙目になってむくれるはやて。

……ごめん、はやて。可愛いだけで全然怖くないよ。

「いや、だって夢かどうか確かめるならやっぱりこれかなって」

そう言った瞬間、はやてが悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「なら、良太郎も夢かどうか確かめんとな」

「は、はやて？」

「うりゃっ！」

はやても俺の両頬を引っ張ってきた。

「いひゃひゃひゃ！（痛たたた！）」

「良太郎のほっぺたも柔らかいな」

はやて、こんなシーンに需要は無いからやめてよ。

「大丈夫や、少なくとも私には需要は有る！」

地の文に答えないでよ！？

周りの人達も微笑ましそうに見てないで止めてー！

海鳴市の上空、そこに光の玉が浮遊していた。

「さーで、だれに“憑く”かな」

その光の玉は空をゆらゆらと漂い何かを探しているようだ。

「よし、決めた！ あいつにしよう！ あいつなら簡単に“契約”出来そうだ！」

光の玉は意気揚々と車椅子の少女に頬をつねられている少年の体の中へと入っていった。

「うっ！」

突然、体の中に何かを通り抜けるような感覚がする。

「え？ 良太郎、どうかしたんか？」

ようやく両頬から手を離してくれたはやてが心配そうに聞いてくる。

「いや、今何かにぶつかったような気がして」

辺りを見渡してみるけど、特にそれらしいものは無かった。

「あっ！ 良太郎、体に砂が」

はやてが俺の体をポンポンとはたいて砂をはらいおとす。

「うわっ！ 本当だ。いつの間に」

俺も体の砂をはらいおとしていく。

「ん？」

砂をはらっているとポケットに何か入ってるのに気づいた。

取り出してみると黒い定期入れがあった。

「やばっ！ 持って来ちゃった」

あの電車の事で定期入れの事すっかり忘れてた。

「ええっ！ それってまずいんじゃない？」

「うん、もう一回警察署に行こう」

車椅子を走らせて警察署に向かう。

「お前の望みを…」

ズザァン！

「へぶっ！」

一瞬、砂か何かを踏んだ気がしたけど気にせずに車椅子を走らせた。

side???

「落とし物？ ああ、そう言えばそんな事を言ってた子達がいたよ」

「本当ですか!？」

パスを探していた少女はお巡りさんからその答えを聞くと嬉しそうに聞き返す。

「けど、その子達何があったのか、よく分からない内に帰っちゃったんだよ」

申し訳なさそうな顔で言うお巡りさん。

「そうですか……」

その言葉に少女は落胆した表情になってしまふ。

「あつ！ でもその子達、双子で一人は車椅子の子だったからね。目立つと思うから、今から探せば見つかるかもしれないよ」

「そうですか。ありがとうございます」

少女はお巡りさんにお礼を言うと警察署から駆け出していった。

それを見送ったお巡りさんは一人呟く。

「……そういえば、さっき来た子も同じような事を聞いてきたなあ」

「あ・の・野郎！ よくもやってくれやがったな！」

ビュン！

「うつ！」

俺の体にまた、何かがぶつかったような感覚がする。

「え？ 良太郎、また何かあったんか？」

心配そうに見つめるはやてに、何でもないと言おうとしたけど……

「俺、参上！」

え？ 何で口が勝手に動くの？ 何で体が勝手に歌舞伎みたいなポーズを取ってるの？！

「りよ、良太郎！？」

ああ、案の定はやてが驚いてる。

「へへっ、これで自由に暴れられるぜ！」

しかも、何か物騒な事を口走ってるし！

「良太郎！ 本当にどうしたんや!？」

心配したはやてが肩を揺さぶってくる。

「うるせえ！」

そんなはやてを突き飛ばそうとしている。

（うわぁ！ ちょっと駄目ー!!）

「うぐっ！」

突き飛ばそうとしてた手がピタリと止まる。

「こいつ……何で、抵抗…出来やがる」

（止まれえええええ!!）

「うおっ！」

ズザァン！

何かが出て行く感覚と共に、体から砂が吹き出した。

その砂は形を変え、上下が逆さまになった怪人？ になった。

「な、何だ（何や）これ!？」

「おい、お前！」

驚く俺達に砂の怪人がけんか腰に俺に指を指してきた。

「えっ！ 俺！？」

「そうだ、お前だ。お前、何で俺を追いつけた？」

「え？ いや、何でとか聞かれても、無我夢中で……」

「だぁーっ！ 何だよそれ！！ そんなんで納得出来るか！！
もう一回憑かせろ！」

砂の怪人が光の玉に変わり、俺の体に入ってきた。

「うっ！」

また何かが通り抜ける感覚、どうやらさっきから感じてた感覚はこの砂の怪人が入ってきたせいらしい。

「何だ、やっぱり普通に入れるじゃねえか」

やっぱり口が勝手に動く。

これって、あの砂の怪人に操られてるのか！？

『ちょっと！ 出てって行ってよ！』

口には出ないけど叫んでみる。

「はあ！？ お前、何で意識残ってたんだよ？！」

返答が帰ってきた。

どうやら話すつもりで念じれば通じるみたいだ。

『何でつて……それじゃあ、俺が意識を失ってなきゃおかしいみたいじゃないか』

「普通はそういうもんなんだよ!!」

うつ、こんな得体の知れない砂の怪人に普通云々とか言われた……

「聞こえてんぞ、この野郎!!」

今のも聞こえてたらしい。

「え？ え？」

はやてが混乱してあたふたしてる。

珍しいな、はやてがこんな表情するなんて。

けど仕方がないかもしれない。

多分、はやての目から見たら俺がよく分からない独り言を言ってるように見えてると思うし。

「何で？ 何で良太郎の声が頭の中から聞こえてくるんや？」

って、聞こえてるの!？

ちょっと試してみよう。

『も、もしも。はやて、聞こえる?』

やや緊張しながら話しかけてみる。

これで返答が無かったら、スゴく恥ずかしい。

「き、聞こえる……聞こえるで!」

良かった、聞こえてるみたい。

「てめえら、さっきから俺を無視してんじゃねえ!!」

俺の中に入ったままの砂の怪人が怒りのあまり叫んだ。

というよりも、さっきから叫んでばかりな気がする。

「なに体乗っ取られたまま普通に会話してんだよつ!!」

『!!! そ、そうだった。俺、体乗っ取られてるんだった。どうしよう、はやて!?!』

わたわたと慌てながらはやてに聞いた。

「お、落ち着くんや。さっき、何か追い出せてたやん。頑張れば何とかなるかもしれへん」

『頑張るって、どうすれば……』

「気合いや！」

『ええっ！？』

ちよつとアバウト過ぎない！？

「大丈夫や！ 良太郎なら出来る！！」

いや、何でそんな自信満々なの？！

……あれ？ でもさっき追い出した時も気合いだつた気がする。

……ちよつとやってみよう。

『てりや！』

気合いを込めてかけ声を上げてみる。

「「……………」」

あ、あれ？ 何も起こらないな。

「ぶっ、あははははははは！ 何だそのへなちよこなかけ声は？」

「良太郎、さすがにそれはちよつと……………」

ひどい！？ 砂の怪人はともかくはやてまで！？

「もうちょい気合い入れな駄目なんやないかなあ。なんて言うかう……………叫ぶぐらいやないと……………」

「へっ！ そんなでどうにかなるわけ…『うおーーーーっ！』」
どわぁ！」

砂の怪人が俺の体から出ていった。

……やってみるもんだな。

「嘘だろ……何でこんなんで追い出されるんだよ！？」

砂の怪人が驚いてる。

「嘘……特異点……しかも念話まで……この世界に魔導師はいないはずなのに……」

「え？ どちら様？」

突然現れた少女に目を向ける。

俺達と同じくらい年齢の子で全体的にフリフリした白い服に黒いスカートをはいている。

「なっ！？ 特異点？！？ マジかよ！？ 最悪じゃねえか！？」

砂の怪人は何かを理解したようで頭を抱えて悔しがっている。

「「特異点？」」

俺とはやては首をかしげた。

この少女がさつき現れた時にも言っていたけど何の事だろう？

「君たち、パス拾った人達よね？ スッゴい偶然！ まさか特異点が拾ってくれるなんて！」

さつきまでの驚いた表情はどこへやら、少女は嬉々とした様子で語りかけてきた。

「あの、特異点って一体……」

何ですか？ と聞こうとした瞬間。

「見つけた。車椅子の双子……」

どこからか少年が歩いてきた。

けど、どこか様子がおかしい。

汗一つ掻いていないのに疲れきっているかのように足取りがフラフラとしている。

それだけなら体調を崩している、って言うるかもしれない。

だけど、彼の体からは……

「砂？」

サラサラと大量の砂がこぼれ落ちていた。

そして、その砂が集まってくるとコウモリのような怪人になった。

「な、なんやあれ!？」

はやてが驚きの声を上げた。

「イマジン……」

少女がポツリと呟く。

「イマ……ジン？」

あの怪人の事かな？

「ねえ君、あいつと戦って！」

少女はこちらに振り向くととんでもない事を言ってきた。

「ええっ！ 無茶言わないでよ!？」

「大丈夫、君には資質が有る！ 電王になれる資質が！」

「え？ 電…なに？」

「うおおおお！」

コウモリ怪人が突撃してきた。

「うわっ！」

それを横に飛んでかわす。

「これって、ひょっとしてピンチなんやないか?!」

「ひょっとしなくてもピンチだよ!」

はやての車椅子を押して逃げ出す。

フリフリした服の少女もついてくる。

「待てええええええ!!」

「うわっ! 追いかけてきた!」

「ど、どないしょ」

コウモリ怪人がものすごい勢いで追いかけてきた。

「君たち、どっちかパス持ってるよね? 黒いケースのパス。それで変身して!」

黒いケースのパス……あの定期入れの事か!

定期入れ改めパスをポケットから取り出す。

「良く分からないけど……変身すれば何とかなるの!?!」

「なるなる! だから早く変身してーっ!」

少女が悲痛に叫んだ。

何故なら、さつきから追いかけて来ているコウモリ怪人が超音波みたいな衝撃波を放ってきているからだ。

「へ、変身！」

そう言うのと腰の周りに銀色の光が集まり、ベルトが現れた。

「ちょ、ちょっと！　ここからどうすればいいのーっ！」

「ベルトを繋いで、バックルにパスをかざすのよーっ！」

必死なせいか会話がほとんど叫び声になっている。

俺はコウモリ怪人の超音波をよけながら急いでベルトの接続部分をはめ込む。

そして、パスをバックルにかざした。

体が光に包まれる。

光が収まると中央に銀色のレールが走った真っ黒なボディースーツを纏っていた。

「な、何やこれ。変身ヒーロー？！」

言いたいセリフ先に言われた！

い、いやとにかく！　あの子の言うことが確かならこれで戦えるはず。

俺は、はやてをフリフリ服の少女に預け、コウモリ怪人に向かっていった。

「はぁーっ！」

コウモリ怪人に殴りかかる。

パコッ！

「「「……………」」」

「あ、あれ？」

「効くか！ そんなもん！！」

バキッ！

「うわぁ！」

コウモリ怪人に殴り飛ばされた。

「くっ、この！」

起き上がり、今度は何度も殴る。

「効かねえって言ってんだろ！」

「うわぁぁぁぁ！」

俺は、何メートルも後ろに殴り飛ばされてしまった。

「ちょ、ちょっと、全然ダメダメやん。良太郎が死んでまう!」

はやてが焦った様子でフリフリ服の少女に訴える。

「あ、あれ? 変身すればデバイスがある程度補助してくれるはず
なんだけど……」

「それっぽい全然無いんだけど!?!」

俺は追撃してくるコウモリ怪人の攻撃を必死にかわしながら叫んだ。

『おい、俺と代われ! さっきから暴れ足りないんだよ!』

頭の中から砂の怪人が話しかけてくる。

「どうやって!?!」

『知るか!』

「ちょこまかするな!」

バキッ!

「うぐっ!」

コウモリ怪人の攻撃をかわしきれずに食らってしまっ。

ドカツ！ バキッ！ ドコッ！

ヤバイ。これ死ぬかもしれない。

はやて、ごめん。

「良太郎——っ！」

はやてがこっちにやってくる。

「駄目や、良太郎を殺さんという」

はやてがコウモリ怪人に涙目ですがりつく。

「ならお前から先に死ね！」

バキッ！

「きゃあ！」

はやてが車椅子からたたき落とされた。

「はやて！？」

倒れたはやてにコウモリ怪人が襲いかかろうとしている。

「やめろ——！」

コウモリ怪人に飛びかかる。

「ぐわっ！」

不意をついたせいかコウモリ怪人が倒れる。

『おい、お前。あいつを助けたいんだろ？　だったら俺と代われ！
暴れるついでに何とかしてやる！』

「だからどうやって?!」

「ベルトの赤いボタンを押して!」

少女に言われた通り赤いボタンを押す。

押した瞬間、ミュージックホーンが鳴る。

そしてパスをかざした。

『ソードフォーム』

電子音が鳴り、どこからか現れた赤い装甲が体に装着されていく。

そして汽笛の音と共に頭のレールを真っ赤な桃の仮面が走る。

顔にくると桃の仮面がパカッと割れて装着された。

「俺、ふたたび参上!!」

俺……いや、俺の体に入った砂の怪人が歌舞伎のようなポーズをする。

俺の体に入った……ややこしいな。俺（仮）でいいつう。

俺（仮）は腰についた四つの細長いパーツを連結させていく。

連結が完了すると刃が伸び、剣になった。

「てやあ！」

ジャキン！

「ぐわっ！」

飛びかかってきたコウモリ怪人を横風ぎに斬る。

「くっ、貴様！ 何を考えている！ 我々の使命を忘れたか！」

「そんなもん、最初っから覚えちゃいねーよ。さっきはへこんだが、こっちの方が面白そうだぜ」

剣を構える。

「っていうか、俺はこういうのがやりたくて来たんだよ。相手は関係ねえ！」

俺（仮）が言い放つとコウモリ怪人はため息をつく。

「お前、バカか？」

「言つとくが俺は、最初からクライマックスだぜ！！」

コウモリ怪人のセリフを完全に無視して剣を片手に突撃する。

ジャキーン！ ジャキーン！ ジャキーン！

「ぐわっ！」

コウモリ怪人を何度も斬る。

「オラオラオラ！」

ジャキーン！ ジャキーン！ ジャキーン！

嵐のように、吹き荒れるように剣を振り回す。

「もう一丁！」

ジャキィィーン！！

「ぐわあ！」

横に大きく振り抜かれた一閃にコウモリ怪人が吹き飛ばされる。

「俺の格好いい必殺技を見せてやる！」

パスをバツクルにかざす。

『フルチャージ』

電子音が鳴ると赤い光がバツクルから剣に集まり、刀身が分離される。

「俺の必殺技、パート2！」

電撃のようなエネルギーを纏った剣で縦に斬り、横に斬る！そしてとどめに縦一閃に斬った！

「ぐわあああー！」

ドカーーーン！！

コウモリ怪人は派手に爆発した。

俺（仮）がベルトを外すと変身が解ける。

「はやて！」

はやてに駆け寄り、抱え起こす。

「大丈夫？」

「な、何とか……」

「何であんな無茶をしたの？ 下手したら死んでたよ」

「良太郎が死ぬかもって思ったら体が勝手に動いてたんや……堪忍な」

「うっ」

そんな涙目で見ないでよ……

「えーと、まあ、はやてのおかげで助かった部分もあるし……別に良いんだけど……」

はやてが俺の反応にクスリと笑うと何となくお互いに笑い出した。

「まあ、何はともあれ」

「私たち」

「「もう限界」」

バタリ

「え？　ちよつと二人共！？」

意識を失う前にフリフリ服の少女がこちらに駆け寄るのと新幹線走ってくるのが見えた。

次回予告？

「こいつらはイマジン。未来からやって来た侵略者なの」

「へ？　魔法？」

「あのコウモリ野郎、生きてたのか〜〜！」

「今、イマジンはこの子が一番強く繋がった過去に跳んでる。目的は一つ、過去を変えて、今も未来も変える事」

「よく分からないけど、やらなきゃならない事は分かった気がする」

「変身」

「俺の必殺技、パート2！」

仮面ライダー電王リリカル・クライマックス

第二話 ライド・オン・タイム

さあ、クライマックスの始まりだぜ！

第一話 俺、参上！（後書き）

良太郎「前書きで言った通り、俺の設定を記載するよ」

名前 やがみりょうたろう
八神良太郎

性別 男

性格 はやてに感化されたのか、基本的に優しく朗らか……と言
うよりもゆるいと言った方が正しいかもしれない。

大切な誰かを守る時、強い勇気を発揮する。

割とテンパリやすい面がある気がする。

割とノリは良い。

設定 前世の記憶を持った少年。

八神はやての双子の弟で容姿は瞳の色と髪型を除いてほぼ一緒。
いつも額にゴーグルを掛けている。

双子だからか、はやてに思考を読まれたり、ハモったりする事がある。

シスコンは禁句ワード

良太郎「……何か、最後の所に変なのが……」

モモタロス「へー、良太郎はシスコンなのか」

良太郎「いや、違うから！ はやての事は可愛いと思ってるけど、シスコンじゃないから！」

モモタロス「へっ！どーせ嘘だろ？ シ・ス・コ・ン！」

ブチッ！

『モモソード！ ウラロッド！ キンアックス！ リュウガン！』

良太郎はデンカメンソードを構える。

モモタロス「りよ、良太郎？」

良太郎「食らえっ！ 時系列、設定、その他諸々無視の必殺、電車斬りiiiiiii！」

モモタロス「ぎゃーーーーーっ！！！」

ドカーーーーーン！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5278j/>

仮面ライダー電王～リリカル・クライマックス～

2010年10月8日13時02分発行